

米山・秋庭研究室

新たな情報学研究へ

教授 米山 優

情報学研究とその哲学的背景

情報学研究には、技術的基盤、情報伝達技術、情報表現法、それらを組み合わせた情報のスタイルについての考察が不可欠である。この立場から、わたしは、「秩序としての情報」という考えを出発点に、連歌・連句、文化論、空間論、風景論、そして近代化論にまで及ぶ内容を理論的に考察している。その背後には、「最後の普通人」と言われた哲学者ライプニッツの「モノドロジー」の現代的かつ日本の解釈があり、そこからサイバースペースを〈モノドロジックでポリフォニックな空間〉として捉えることを提案している。

情報創造の連句モデル

具体的には例えば、「情報創造の連句モデル」を提案している。それは次の規則からなる。「1 物事の〈アトム化〉に心がけよ」「2 〈アトム化〉を超えて〈モノ化〉の道を進め」「3 〈モノ化〉には階層とダイナミズムのあることをよく理解せよ」「4 〈物付〉から〈心付〉への上昇とでも言うべきものを考え、それを「暗黙知」や「一行見出し」そして「概念づくり」の話として理解せよ」「5 〈モノ化〉の階層とダイナミズムには心身問題が伏在していることを強く意識せよ。そもそもモノは必ず身体を持つ」「6 〈モノ化〉の只中で、調和はポリフォニックなものとなる」「7 このポリフォニックな調和を現出させる身体は、集会的としか言いようのないものである」

感性から計算の美学へ

准教授 秋庭 史典

美学の課題と情報科学

「自然とは何か」、「そのなかでわたしたちはどう生きるべきか」を考えるための入り口となり、この二つの問いに目を開かせるもの。それをかつて人は「美」と呼びました。「美学」の課題は、そうした美を探し、世界のなかに位置づけることです。わたしは、この美学の道具立てを、従来型の、人の感性や直観・主観から出発する判断の論理学から、情報の流れとしての世界をアルゴリズムの立場から解明する、計算論の立場へと転換することを主張しています。このような美学は、情報科学と強い親和性を持っています。

ハーネスの美学

ハーネスということばを、わたしはかつて、最小限の人工物の投与によって自然のシステムを動かし、それによって動き始めた自然のシステムが今度は人工物を含めた自然の全体を動かしていくという、あたらしい制御の方法を指すことばとして使用しました。このハーネスの美学に基づき、ミュージアムにおける展示、科学画像と美術的画像の異同と効果的使用、合成生物学研究者との生命美学、触譜に基づく触覚の実験美学的研究などを行っています。

